温泉寺の名兵衛地蔵

二井田の温泉寺の入口に高さ二尺近い石地蔵が立っている。伝えによると「さいのかわら」の地蔵をかたどったものといわれ、ムラでは子どもが亡くなったときに、さいの河原で待っているこの地蔵が、地獄の鬼から守ってくれるということで、親に先だって子どもが亡くなったときはこの地蔵においのりする。この地蔵の背中に「元禄十二年五月二十四日　施主　細田屋名兵衛」と文字が刻まれている。頭の部分にえぐり取られたような傷があり、伝えによると戊辰の役(一八六八)のときの流れ弾によるものだという。

さて、この地蔵を建てた細田屋名兵衛について次のような話が伝えられている。

今から二八〇年ほど昔、二井田の里に大金持の大阪商人細田屋名兵衛という人が住んでいた。名兵衛がどんな理由で二井田に住みついたのかはわからないが、このころ東北地方の山々に眠っている金、銀、銅の採掘が盛んになり、遠いみちのくを目ざして来る人々が多く、この名兵衛もそのうちの一人だったといわれる。二井田は米の産地であり、物資の輸送につごうのよい米代川が近くを流れ、ムラの近くに船着場があり、尾去沢鉱山の採掘などもあって、二井田から米を鉱山へ運び、鉱山から鉱石を積んで能代へ下って商売をし、名兵衛は長者に成り上ることに成功したといい伝えられている。

名兵衛は大きな屋敷に住み、田畑を多く所有し、自分が出世したのは仏様の信仰によるものと考え、自分の守本尊を信じて、わざわざ大変な費用をかけ故郷の四国から石材をとりよせ、二尺近い地蔵を刻ませてムラの温泉寺に寄進したといわれる。今もムラの人たちは、この地蔵を名兵衛地蔵と呼んでいる。名兵衛はその後、大阿仁鉱山へ移ったといわれているが、その後の消息はわかっていない。